論説

物語の意義と構造(三)

小野坂　弘

目次

Ⅰ　物語の意義（第二九巻四号）
Ⅱ　物語の構造
はじめに――ウンベルト・エーコの記号論と物語の構造
一　レヴィ＝ストロースとエーコの立場
二　テクスト理論
三　モデル作者とモデル読者

四　テクスト共同作業の初期作業
五　言述構造
六　物語構造
七　予想と推考散策
八　世界構造
九　行為項構造とイデオロギー構造
第一章　ケネス・バークの劇学と五基語（Pentad）モデル
一　ケネス・バークの劇学（Dramatism）
二　「動機の文法」
三　バークの五基語（Pentad）モデル
四　バークの五基語モデルと物語の構造
第二章　ナラトロジー（Narratology）の物語構造論
一　プロップの『昔話の形態学』と機能論
二　ブレモンの物語の論理学（以上、第三〇巻二号）
三　グレマスの物語記号論
四　ジュネットの物語言述の分析（以上、本号）
第三章　ポール・リクールの『時間と物語』と物語的アイデンティティ（以上、次号）

三　グレマスの物語記号論[19]

㈠　アルジルダス・ジュリアン・グレマスは、フランスの言語学者リュシアン・テニエール（Lucien Tesnière）の提案を採用する。「われわれは――彼自身は、おそらく教育的配慮しか頭になかったのであろうが――基本的な言表を［芝居の］場面（spectacle）にひき比べたテニエールの着目におどろいたことをすでに述べた……。伝統的な統辞論によると、機能……は語によって演じられる役割――そこでは主語は《行動を起こす誰か》で、目的語は《行動を受ける誰か》、など――にすぎないことを思い起こすならば、節（proposition）は、そのような考え方からすれば、事実、ホモ・ロクエンス［言葉を話す人］が自分自身のために演じる一つの場面に他ならない。しかしその場面にはそれ独特のものがある。それは場面が永続的だということである。アクションの内容は絶えず変化し、役者も変わるが、場面＝言表……は常に同じものである。なぜなら、その永続性は、役割の配分が常に決まっていることによって保証されているからである」（『構造意味論』二二四－二二五頁）。「統辞的なはたらきは、一つの過程（procès）、幾人かの演技者（acteurs）、それに多かれ少なかれ周囲を取り巻いている一つの状況……を含む同じ小さな場面を、そのつど数百万という数で再生産するが、そのはたらきはおそらく本ものに似せて作られたものであって、《現実の》世界における事物の存在の仕方には対応していない。それでも、言語の象徴体系のおかげで、われわれがこのようにして統辞規則を用いて目の前で展開させる、世界についてのわれわれの視像（ヴィジョン）とその視像をわれわれなりに組織化するそのやり方――その二つだけが可能なのだが――であることに変わりはない」（『構造意味論』一五三頁）。「まさしくここに、その全体として捉らえられるには大きすぎる意味世界を、人間にとって近ずきやすい小世界に組織するための、可能な原理の一つとして考察された行為項モデルという仮説

の出てくる事情が見られる」と（『構造意味論』二二五頁）。

(二) (i) グレマスの行為項モデルは、プロップとは違って、機能からではなく、〈行為項（actant）〉と呼ばれる行為者から出発する。役割を体現している具体的な登場人物――グレマスはこれらを「演技者」と呼ぶ――と区別するために、行為項と呼ぶのである。「……演技者は一つの発現＝民話の内部で制定できるとしても、演技者のクラスである行為項の方は、すべての民話からなる資料体によってしか制定できないという結果が出てくる。つまり演技者の分節は、一つの個別的な民話……を構成し、行為項の構造は一つのジャンル（genre）を構成する。従って、行為項は演技者に対してメタ言語的ステイタスをもっている。ただし、行為項は、完成された機能分析を、つまり完成された行動範囲の構成を前提としている」（『構造意味論』二二六―二二七頁）。

(ii) グレマスはプロップの『昔話の形態学』とスーリオの『二十万の演劇状況』[20]の役割目録による機能的アプローチと自分の統辞論による演繹的アプローチの両者の比較から、三対の行為項カテゴリーを抽出する。グレマスは言う。「統辞論から借りたこの行為項モデルを、意味論的な新しいステイタスに合わせ、また小世界の新しい次元に合わせるためには、実際的秩序に属するふたつの手直しが引き続き必要であった。一方では、統辞論的行為項を意味論的ステイタスに還元することを考慮に入れること（マリーは、手紙を受け取ろうと、あるいは誰かが彼女に手紙を送ろうと、常に《受け手》である）、他方では、一つの資料体の内部で表出され、その散布状態がどうであれ、ただ一つの意味論的行為項に付与されたすべての機能を統合することである。それは表出されたそれぞれの行為項が、背後に行為項固有の意味の充当をもちうるようにするためであり、また行為項間の関係がどのようなものであれ、確認された行為項の集合が表出全体を代表するものだと言えるためである」（『構造意味論』二二五頁）。

①　行為項カテゴリー《主体》VS《客体》

これは主語と目的語を対立させるもので、統辞論的である。「目的論的関係が、この意味素結合の結果、意味効果《願望》［リクールは『欲望』と言う――筆者］を実現する語彙素として現れると考えることができる。もしそうだとすれば、《民話》ジャンルと《演劇》ジャンルという二つの小世界は、願望に従って分節された最初の行為項範疇によって規定され、願望が《探索（quête）》の、同時に実際的でもあり、神話的でもある形態のもとに表出されるような発現＝物語を生み出すことができるのである」（『構造意味論』二二九頁）。

②　行為項カテゴリー《送り手》VS《受け手》

これは伝達（＝コミュニケーション）の関係に基づく。送り手と受け手が対立している。ここでも統辞論的である。プロップの場合には送り手は時には派遣者（＝王）であり、時には父親である。両者は「願望されている者（たとえば、王女）」の父親＝派遣者のように融合していることもある。受け手については魔法昔話では、主人公と融合している。

③　行為項カテゴリー《補助者》VS《反対者》

「……この最後の二つの行為項の二次的性格」はあきらかである。「ここで問題になっているのは状況への《参加者（participants）》であって、場面の真の行為項ではないということができよう」。「機能が行為項を構成するものとみなされている限り、相の範疇が、主体＝行為項の下位系列的な定式化であるような状況項（circonstants）に構成できるということを、どうして認められないかがわからない。われわれの関心をひく神話的表出においては、補助者と反対者は、行動する意志の投影物にすぎず、またその願望とのかかわり合いに

おいて、益になる、あるいは害になると判断された、主体自身の想像的抵抗物にすぎないということがよく理解できる。この解釈にはそれ相応の価値がある。それは、二つの目録において真の行為項と並んで状況項が現れる事実を説明しようとし、また状況項の統辞論的ステイタスと意味論的ステイタスとを同時に説明しようとするのである」（『構造意味論』二三三―二三四頁）。リクールはこの第三の行為項は「語用論［＝実用論］的であり」、「行動の関係」に結びつくと言う（『時間と物語』Ⅱ七七頁）。

(iii) グレマスは更に、プロップの三一機能を二項結合に還元する（以下、『構造意味論』二五二―二五九頁）。その中に《禁止 VS 違反》があるが、この〈禁止〉とは、レヴィ＝ストロースが指摘しているように、〈命令〉の《否定変形》にすぎない。とすれば、もし

命令＝契約の成立
受諾

とすれば、

禁止＝契約の破棄
違反

となる。

しかし、禁止が命令の否定形であり、違反が受諾の否定であるならば、上の四つの辞項は一つの意味素体系の表出にすぎないことになる。すなわち（以下の $\overline{A}$、$\overline{a}$はそれぞれ範疇A、辞項aの否定を表す）、

範疇の分節として、

$$A \ VS \ \overline{A}$$

辞項の分節として、

$$\frac{a}{非a} \ VS \ \frac{\overline{a}}{非a}$$

試練については次のように言える。

A　＝指令 VS 受諾
F　＝直面 VS 成就
非c＝帰結

とすれば、次の表が成立する。

「試練の図式は、ただし、その性質については明確にしなければならないけれども、論理的続起（consécution logique）として現れるのであって、連辞的要素連続としてではない。それは次のような理由からである。(a)対Aと対Fは必ずしも常に隣接しているわけではない。たとえば、主人公の派遣からずっとあとになってやっと裏切り者との主要な直面が生じる。(b)対Aと対Fは、試練の図式から外れて、それだけで見いだされることがある」と（『構造意味論』二五九頁）。以上述べたように、契約において受諾は命令を、違反は禁止を前提としている。後者は前者なしにはあり得ない。このことは試練の場合にも言える。つまり、連辞面に並ぶ二つの機能は、単に対を作る

提案図式	資格を付与する試練	主要な試練	栄誉をもたらす試練
A　指令	贈与者の第1機能	命令	任務の割当て
受諾	主人公の反応	主人公の決心	――――
F　直面	――――	戦闘	――――
成就	――――	勝利	成就
非c＝帰結	補助者の受け入れ	欠落の除去	判別

だけではなく、範列的な＜A VS 非A＞という意味素範疇を構成するのである。非AはAを前提にしているからである。赤羽は言う。「……この深層の論理的な順序を表す範列的な前提関係が、出来事の時間的かつ擬因果的順序をもった継起の軸に転換されて、『話＝筋（histoire）』が構成されるということになる。その他時制やアスペクトなどが考慮に入れられるこの操作を彼［＝グレマス］は時間化と呼んでいる」と（『意味について』四一八頁）。

(iv) グレマスは言う。「試練は、従って、この事実から、物語の定義を通時態として説明する還元不可能の核とみなすことができるかもしれない。この通時的ステイタスを明確にする若干の指摘を、今ここで行うことができる。①AとFとの関係は、続起関係とみなしうるのであって、必然的な含意関係ではない。というのも、Aあるいは―Aは、それらの存在が必ずしもそのあとのFの出現をもたらすことなく、物語の中にそれだけで登場することがあるからである。従って、AはFを前提としていない。他方、FはAに先立たれることなく、物語の中に存在しうる。それゆえFはAを前提としない」。試練はその意味で、自由のある種の表出をかたちづくっている。「②AとFとの関係が続起関係であるとしても、それは《隣接性（contiguïté）》という表意体によって表出されるような関係として同定されるべきではない。続起は自ら進んで隔たりを認める。またとりわけ、主要な試練はその二つの機能対AとFとを引き離し、結果としては逆に、そうすることによって物語をひきしめているのがわかる。③けれども、A＋Fの自由な続起に通時的構造のステイタスを与えるものは、この出会いの自由から生じる必然的な帰結（conséquence）である。帰結は、実際、必然的である。それはA＋Fの存在を前提としている。そのことは、ある種の物語に見られる緩除法的短縮においてはっきりとわかる。そこでは、物語がその転移に先行する試練について言及することなく、主人公に補助者が付けられるのである。試練は、従って、非cという帰結の出現によって認めら

れるAとFとの続起へと導いていくものにすぎない」と（『構造意味論』二六八―二六九頁）。

「試練はそれだけで物語を通時的に規定するが、物語の時間的な展開は、さらに、語りの行為＝知（savoir-faire）の基本を構成する若干数の手順によってはっきりと示される。この行為＝知は、物語の≪二次的加工≫（それはいずれも演劇的なものであるが、筋の運び・はらはらさせる場面・反発力・緊張の名で知られている）をかたちづくるが、その加工は諸機能の隔たり、物語が構成する諸機能の連鎖内での意味素内容の隔たりによって規定できるのである」（『構造意味論』二七〇頁）。

「①社会的領域：法の秩序、社会の契約に基づく組織体の秩序。②個人の、あるいは個人間の関係の領域：人間相互間の伝達による個人的な諸価値の存在と所有。以上の結果、物語の範列的な把握によって、これら二つの領域の間、個人の運命と社会の運命の間に相関関係の存在することが明確となる。このように理解すると、物語は、集団的価値論のレベルに存在する諸関係を表出しているにすぎないことがわかる。物語は、これらの関係を示すことができる諸形態のうちの一つの表出形態にすぎないのである」（『構造意味論』二七二頁）。

「おそらく一般化しすぎることになるかもしれないが、この物語というジャンルは二つの大きなクラスに分類できるように思われる。現存の秩序が受け入れられている……物語と、現存の秩序が拒否されている……物語とである。第一の場合、出発点は、存在するある種の秩序の確認、およびその秩序を正当化し説明しようとする欲求にある。存在し、社会の、あるいは自然の秩序であるがゆえに人間を越える秩序（昼と夜、夏と冬、男と女、若者と老人、農耕者と狩猟者などの存在）が人間のレベルで説明されているのがわかる。探索、試練は、もろもろの秩序を創設してきた人間行動なのである。物語の調停は、≪世界を人間化する≫こと、世界に個人的および出来事的な次

元を与えることにある。世界は、人間によって、世界に統合された人間によって、正当化される。第二の場合、存在する秩序は不完全なもの、人間は疎外されたもの、状況は耐えがたいものとみなされる。そこで、物語の図式は、調停の原型として、救済の約束として投影される。人間、個人は世界の運命を自分自身の責任において引き受け、世界を一続きの闘争と試練によって変形しなければならない」と（『構造意味論』二七八頁）。リクールが主張するように、これは明らかに歴史の導入であり、価値論的な次元の導入である。

リクールは言う。「……筋を理解することである物語的理解は、統辞法的な論理を土台にして物語を再構成することに先行するのである」。「本質的に無時間的な使命をもつモデルの内部における、通時的要素の抵抗は、もっと根本的な抵抗、つまり、単純な年代的順序に対する物語的時間性の抵抗のしるしであると私には思える」（『時間と物語』Ⅱ七七－七八頁）。

㈢　グレマスは『構造意味論』の物語記号論を『意味について』と『モーパッサン』によって徹底・充実させる、とリクールは言う。徹底と言うのは、物語性を記号論体系の最も基本的な働きに結びつけることであり、そうすることによって物語性は偶然から守られた活動として正当化される。充実と言うのは、複雑なものへの発展である。[21]

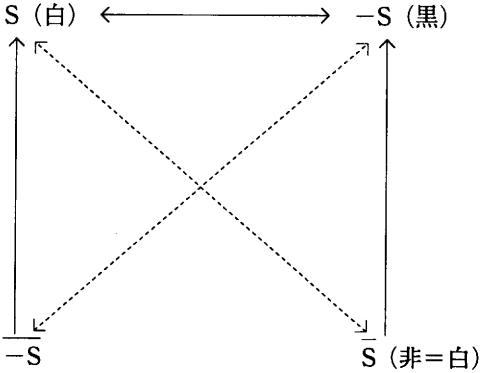
(i)　「人間精神は、文化的対象（文学的、神話的、絵画的な対象等々）の構築にまで到るために、単純な要素から出発して、複合的な行程を辿るとき、その途上で、自由に操作しうる選択とともに、受け入れなければならない拘束に出逢う」。三つの主要な段階がある。①深層構造。記号論的理解可能性の諸条件を規定する。②表層構造。物語化の操作の分節化されたものが見いだされる中間層である。③表出の諸構造。記号表現を生産し、組織する。しかじかの言語、しかじかの素材に固有なままに止まる。それらは語彙素、形、色などといった表層の文体論

によって研究される（以上、「記号論的拘束の働き」一五五―一五六頁）。

(ii)　第一段階の「深層構造」の段階は「構成モデル」の段階である。グレマスは言う。「意味作用がその表出の諸様相と無関係であることを少しでも受け容れるならば、人は自律的な構造的一段階を認めざるをえない。その段階とは広大な意味作用の場（シャン）を組織する場所であり、それは一般記号理論全体に組み込まれるはずであろう」。「……言語学の計画が、単純な要素と最初の核から出発して、無限の言表の生産――その言表は変換し、相互に結びついて、言述としての言表列をつくりあげる――を説明するような、結合的あるいは生成的性格の機構を捉える点にあることが考察されえたとするなら、次は逆に、意味作用の生成の出発点となる諸審級を思い描いてみなければならない。可能な限りわずかしか分節されていない意味の集塊から出発して、継起的に段階をおりてゆきながら、ますます磨きをかけられた意味作用分節を手に入れて、自らを表出しながら意味が目指すふたつの目的――分節された意味すなわち意味作用として、また意味についての言述、すなわち意味のそれまでのあらゆる分節を自らのやりかたで展開する大きな言い換えとして現れること――に同時に到達できるように。言いかえれば、意味作用の生成は、まず言表が生産され、それからそれらが結びついて言述をつくりあげるという筋道を通るわけではない。それは、その行程で、語り構造によって引き継がれ、その語り構造こそが、言表に分節された筋の通った言述を生み出すのである」と（一八三頁）。

グレマスは言う。「言語的表出の意味論とは違った基礎的意味論の計画は、意味の理論にもとづくことしかできない。したがってそれは意味の把握の諸条件の明示化と、そこから演繹することができ、その後で公理系という形を取るだろう、意味作用の基本構造に直接的に結びつくことになる」。「この意味作用の基本構造が、意味小宇宙の

内部で意味の最初の分節を説明するのに適した記号論モデルを提供する、というのがこれからの仮説となる」。「したがって意味宇宙をまるごと分節するために必要な意味素範疇の基本的目録は同時に、可能なあらゆる小宇宙の潜在的目録となる」。「そういうわけで、構成モデルは、小宇宙の意味実質の分節のために形相として使われる、意味作用の基本構造でしかない。基本構造の諸項の同位系は意味単位としての小宇宙をいわば保証し、基礎づけ、われわれの公理化の歩みの内部で、構成モデルを規準形とみなし、基礎的意味論の出発点となる審級とみなすことを可能にする」と（以上、一八五―一八六頁）。



※←→は対立、→は前提、←‥→は矛盾を表す

そこでグレマスは有名な〈記号論的四角（carre sémiotique）〉を提示する。白が意味作用をもつのは、次の三つの関係が分節できるからである。すなわち、矛盾の関係――白（S）VS 非＝白（$\bar{S}$）、対立の関係――白（S）VS 黒（−S）、前提の関係――非＝白（$\bar{S}$）VS 黒（−S）[22]。

「いかなる文法も多少ともはっきりしたかたちでふたつの構成部門、すなわち形態論と統辞論を備えている。形態論は、その諸項が相互に規定された分類学の性格をもち、統辞論は操作的規則の総体、あるいは形態論の諸項を操作する方式の総体から成る」。「……意味作用は同時に、主体による意味の把握、または生産とみなされるとただちに、力動的表象を受け入れられるということだ。この力動的相を考慮

に入れれば、分類学的モデルを構成する基本的関係と、この関係の投影、つまり操作との間に等価性の網目をつくりあげることができる」。グレマスは「基礎文法の諸特徴」を次のように要約する。「①語り文法は分類学的モデルが提供する基本的形態論と、あらかじめ相互に規定された分類学的項に操作を施す基礎的統辞論とから構成される。②語り統辞論とは、内容の諸価値の充填の対象となりうる項に対して行なわれる操作にある。その結果語り統辞論は、それらの項を否定し、かつ肯定しながら、あるいは――このことは結局同じことになるのだが――それらの項を分離［＝離接］し、かつ接合［＝合接］しながら、それらを変換し、操るのである。③統辞操作は、確立した分類学的枠組内に位置しているのだが、向きをもち、このことから予想可能、計算可能となる。④これらの操作はしかも、系列に順序立てられ、操作的統辞単位に線分化しうる過程を構成する」と（以上、一八八―一九一頁）。

(iii)　第二段階は「表層構造」の段階である。グレマスは言う。「……物事をひじょうに単純化すれば、次のように言うことができよう。すなわち、基礎文法は、概念的次元にあって、それが形象という形のもとに表出された物語（そこで人間の、あるいは人格化された演者は事を成し遂げ、試練を受け、目的を達するだろう）を生み出しうるためには、まず、中間的な記号論レベルで、擬人的ではあるが、形象的ではない表象を受け容れなければならない。この擬人的レベルこそが、表層の語り文法の名のもとに指し示されるだろう」。「つまり、このような表層文法を構成する範疇は、それらの擬人的性格によって、基礎文法の諸範疇に固有の論理的性格から区別されるのである」。「したがってもし基礎文法の根底にある概念のひとつが統辞操作の概念であるなら、それは、表層のレベルでは統辞行為（faire）に対応するだろう。操作と行為の間に等価性を樹立することによってまさしく、文法の中に擬人的次元を導入することになる。この事実は様々に解釈することができる。(a)論理的操作が自律的メタ言語的過程として

考えられ、それによって操作（または『何らかの』操作子の使用）の主体を括弧に入れておくことができるのに対して、行為は、それが実際的なものにせよ神話的なものにせよ、活動としてある人間主体（または少なくとも擬人化された主体、たとえば『鉛筆が書く』）を含意する。言いかえれば、行為は分類素『人間的』の付加によって特定化される操作なのである。(b)行為について語るとき、人が考えているのは明らかに自然界の記号論レベルに位置する『現実の』行為ではなく、言語行為（行為が表出されることになる言語活動がいかなるものにせよ、つまり自然言語にせよ、そうでないにせよ）であり、メッセージにコード変換された行為である。準拠する記号体系については、行なわれた行為が問題であるにせよ、話された行為が問題であるにせよ、そのメタ記号論的行為という身分規定は（なぜなら記述されたものだから）、それを、コミュニケーション過程内に位置し、送り手と受け手を含意するメッセージ対象とするのである」。「したがって行為は二重に擬人的操作なのである。活動としてそれは主体を前提し、メッセージとしてそれは対象化され、送り手と受け手との間の伝達軸を含意する」と（以上、一九二―一九四頁）。「……ある意味では、統辞行為は、潜在的プログラムを現働化されたプログラムに変換することにあると言いうる。プログラムとして考えられた記述言語が変わらないままなら、変換は、『意欲』という機能を備えた様態言表を、存在様態言表――これは周知の通りあらゆる記述言語の暗黙の前提である――に置き換えることとして解釈されうるだろう」。「要約すれば次のようになろう。(a)表層文法に意欲の様態を導入すれば、ふたつの行為者、すなわち、主辞と目的辞をもつ様態言表を構築できるようになる。欲望の軸は今度は、それらふたつの行為者を結びつけ、それらを潜在的遂行主体と、価値をもったものとして定められた対象として意味論的に解釈することを可能にする。(b)もし意欲の様態が対象に価値を付与するとしたら、様態言表の行為者としてのこの対象は、行為の記

述言表……――そしてその行為はそのものとして価値を付与されることになる――か、収得言表［énnocés attribu-tifs］……――そしてそのとき意欲の現働化は、収得言表において指示された対象―価値の入手によって表現される――かに転換されうる」と（以上、一九六―一九八頁）。「……意欲を機能とする様態言表が主体を行為の潜在性として確立するのに対して、知［savoir］と能力［pouvoir］の様態によって特徴づけられた二つの別の様態言表は、このありうべき行為を、ふたつの異なったやりかたで、すなわち知から出た行為として、またはただ能力に基づく行為として規定するということである。それからまた行為のこのふたつの異なった様態化は遂行の中で認められる。したがつて行為―知（するすべを知っている）……によって様態化された遂行――遂行主体は表出レベルで、策略とごまかしによって行動する場合――と、行為―能力（することができる）……のおかげで成し遂げられた遂行――そこでは遂行主体は、現実のものにせよ魔法によるものにせよ、彼の精力と潜勢力しか使わない――とが区別されるだろう」（二〇三―二〇四頁）。

「基礎文法の基本単位と等価な表層文法の基本単位を配置し終え、もっと大きな単位の構築に移行するために、この表層レベルで矛盾関係が受け容れる抗争的表象を強調しなければならない。……矛盾の擬人的表象が抗争的本性をもつことを認めるなら、連辞列――これは基礎文法のレベルで否定と肯定の操作に基因する内容の諸価値の変換に対応する――はここでは一連の語り言表、その意味論的制限がそれに対峙と戦いの性格を付与するのを努めとするだろうような、そうした一連の語り言表として現れるはずであろう」（二〇〇頁）。〈記号論的四角〉の対立する二項の主体（あるいは主体と反主体）――上の図ではSと−S――を擬人的に表現する〈対決〉（S↔−S）、一方の主体（あるいは主体）の他の主体（あるいは反主体）に対する意欲の様態言表（＝支配を欲する）を存在の様

態言表（＝支配）に置き換える＜支配＞（S→－S）、対象－価値の取得を擬人的に表現する＜取得＞（S↑－S）の三つの遂行が、語り単位が構築される。「遂行の内容が変換の操作図式を構成するということからすると、たぶんそれは語りの統辞論の最も特徴的な単位なのである」。「もし機能と行為者がこの語り文法を構成する要素なら、もし語り言表がその基本的統辞形態なら、語り単位――その代表例はここでは遂行によって表象されている――は、語り言表の連辞列ということになる」（二〇二頁）。「二系列の遂行を区別できる。すなわち、(a)様態的価値の獲得と伝達に当てられた遂行と、(b)対象的価値の獲得と移動によって特徴づけられた遂行。第一番目の遂行は主体を操作子として設け、第二番目の遂行はその後で操作を行う。第一番目の遂行は潜在性を作りあげ、第二番目の遂行はそれらを現働化する」。「様態的価値の最初の階層を表示することができる。その階層は次のように統辞的行程の向きを定める。＜意欲→知→能力⇩行為＞。そしてこの階層は遂行の連辞列の組織化に基礎として役立つのである。このような向きが含意しているいくつかのものはただちに目に入る。(a)能力という様態的価値の獲得だけが、操作主体が遂行を完了しうるようにする。その遂行によって操作主体は対象的価値を自分のものにする［＝訳文は『収得する』とするが、『取得する』の方が良い。以下も同じ――筆者］のだ。(b)その結果、知という様態的価値の獲得が、帰結として行為－能力（行為－能力の獲得という媒介は、行為の現働化に到達するために必要である）の［取得］をもたらす。(c)反対に、知という媒介は、行為－能力の獲得のために必要だとは思われない。この最後の特性のおかげで二種類の主体を区別することができる。すなわち、その遂行の完了を可能にする能力が、最初に獲得された行為－知に由来する、そうした『物知りの』主体と、本性からして『力のある』主体というのがそれである」と（二〇八－二一〇頁）。

リクールは言う。「〈記号論的四角〉の四つの頂点は、そこから、またはそこへと転移［つまり、主体による獲得と反主体からの奪取］がなされる場所となる」。それは「価値の循環的転移」である（『時間と物語』Ⅱ八四頁）。転移という形で表現された統辞的行程（たとえば、S↑S）は実際には、〈遂行単位の連続(suite performancielle)〉であり、それは物語の形式的骨格を形作る。そして、この骨格にしたがって、価値が循環的に転移するのが、物語なのである。[23][24]

(四)　この節の最後に、グレマスの物語記号論に対する批判を、基本的にはリクールに従って纏めておこう（『時間と物語』Ⅱ九一―九八頁）。リクールの批判は、歴史物語において法則的モデルの限界が物語的理解との対比で問題とされていたのと同じく、物語論（ナラトロジー）の合理性と物語的理解との関係に焦点を合わせる。

(i)　グレマスの〈記号論的四角〉に代表される、深層文法レベルの構成モデルは、見事なものであるが、非常に強いモデルなのである。たとえば、白と黒の〈対立〉、白と非白、黒と非黒の〈矛盾〉は強い。強いモデルであり続けない限り、論理的な意味作用は維持できない。このモデルは第一に、グレマスが言うように、以後のすべての操作が本当に「予見可能で、計算可能」であるとすれば、物語るものは何もなくなるであろう。ヴァン・デイクの物語の規定が言うように、記述される行動はいつも、困難なもの、思いがけないもの、異常ないし異様なものでなければならないとまでは要求できないとしても（本稿の「はじめに」の六(三)参照）、何の驚きもない話をわざわざ〈物語〉と呼ぶことはない。最も構成がはっきりしている推理小説・探偵小説でさえも、たとえば、アガサ・クリスティの『アクロイド殺害事件』のように、誰が犯人かについて読者を騙すなど、趣向が凝らされているのである。[25]第二に、リクールがカントを引用しながら述べているように、〈対立〉と〈矛盾〉の等価性には疑問がある。それ故

に、私はグレマスの図を修正したのであるが、そもそものグレマスの図には〈対立〉は明示されていないのである。これらのことから、物語で問題となるのは、ほとんどの場合に準矛盾・準対立・準前提であると言えるのではないか。このことは、リクールが歴史物語と歴史学の法則モデルの関係について、準筋立て・準登場人物・準出来事という概念を導入したことと類比できる。「その書法においてもっとも物語的でない歴史記述ですら物語的理解に依存している」からである（『時間と物語』I、参照）。

(ii) 分類モデルの物語化は、方向づけられない関係から、方向づけられた操作への移行である。このことは上に述べたグレマス自身の文章からも明らかである。この変換には時間が必要であるから、分類モデルは年代順化することになる。われわれが物語を読む場合に、われわれはそこで問題となっている行為や出来事や人物について、論理的な意味だけを読むわけではない。ウンベルト・エーコが言うように、われわれは自分の持つ百科辞典的知識を総動員するし、「相互テクスト性」が言うように、今読んでいるテクスト以外の多くのテクストを関連づけて読んでいるのである。したがって、グレマスの〈記号論的四角〉、グレマスの文法の性格は、論理的性格と「行動の意味論」に媒介された実践的性格の混合文法なのである。

(iii) グレマスが強調する抗争的性格づけもまた、論理的な合接・離接を越える価値・反価値を巻き込むことを避けられない。たとえば、「奪う」とか「与える」という概念は、苦しみを受けるとか、それによって新たに行動を起こすとかいうことと結びついてこそ、意味を帯びるのであるし、われわれは日常的に、そのように読み、理解しているのである。

さらに、無限な程に多種多様な物語の展開！そもそもわれわれが帰納的アプローチを断念して、演繹的アプロー

チに赴いたのは、このことが理由であったはずである。ロラン・バルトは――子供は言語の獲得と共に秩序正しい、ルールに則った行動パラダイムをも獲得するというラカンに対して――物語を同化して語る能力を加える。バルトは物語性はそのようにして育ち、主体となった人間の幻想だと言うが、人間はそのような幻想によってのみ生存しているのである。[26] リクールは言う。「たしかに、西洋の文化圏で、歴史的に同定できる様式を提供してきた、累積する経験が、今日では死に襲われている可能性を排除するものは何もない。これまでに語られてきたパラダイムは、それ自体伝統の沈殿した堆積物でしかない。筋の変容が、ある限界にぶつかる、すなわち、それをこえると、ストーリーを単一で完結したストーリーたらしめる時間的な統合形象化の形式的原則をもはや認められなくなるような限界にぶつかる可能性を排除する可能性は何もない。だがしかし……だがしかしである。恐らく、それにもかかわらず、今日でもなお読者の期待を構造化する調和の要求を信頼し、われわれはまだ何と名づけてよいか分からない新しい物語形式がすでに生まれつつあり、それが物語機能は変容しても、けっして死なないことを証明しているのだ、と信じるべきなのだろう。なぜなら、物語ることがもはや何を意味するかわからないような文化が、いったいどうなるかについて、われわれは皆目わからないからである」と（『時間と物語』Ⅱ四一―四二頁）。

四　ジュネットの物語言述の分析[27]

㈠　ジェラール・ジュネットはロシア・フォルマリストの〈ファーブラ／シュジェート〉の区別に端を発する〈物語内容／物語言説〉の二分割説では、バンヴェニストの〈歴史物語（histoire）／話（discours）〉との混同を引き起こすこと、「叙法に割り当てる事象と態に割り当てる事象とが、必然的に重なり合ってしまうことになる」こ

とから、〈物語内容／物語言説／語り〉という三分割説を提唱する。「実際の順序は、非虚構的な物語言説（たとえば歴史的物語言説）の場合なら、言うまでもなく物語内容（生起した出来事）－語り（歴史家の物語行為）－物語言説、の順序になる。物語行為の産物である物語言説は、場合によっては、言い換えれば潜在的には、書かれたテクスト・録音・人間の記憶などの形をとって、物語行為が終了したのちまでも残存する可能性を持っている。実のところこうした残留現象以外には、物語言説が語りよりもあとに位置するという考えを保証してくれるものは何もない。それが発生する最初の時点では、発話された場合はもとより書かれた場合であっても、物語言説は語りと完全に同時的であり、両者の区別は時間［のずれ］よりむしろ相（アスペクト）［の差］に求められる。つまり、物語言説は発話された言説を指し（モリスの術語に従えば、統辞論的・意味論的な相）、語りは物語言説が生み出される場となった状況（語用論的な相）を指すわけである。虚構においては、こうした現実における物語状況は仮装される」。「ともかく、真の順序はむしろ、語り－物語言説／物語内容といった形になろう。物語行為は物語内容とその物語言説とを同時に創り出す（案出する）のであり、それゆえに物語内容と物語言説は、いかなる意味でも分離不可能であるのだ」と（『物語の詩学』一七－一八頁）。

ジュネットは、純粋の虚構も、純粋な非虚構も共に、存在したことはなく、文学的か非文学的かを問わず、世にある物語言説は、通常、虚構と非虚構との混合体であると言う。

㈡　ジュネットは言う。物語の現代的分析はプロップ以来、物語内容に比重を傾けて来た。ブレモン、グレマス、トドロフの『デカメロン』がそうである。その後ロラン・バルトの「物語の構造分析序説」（一九六六年）とトド

ロフの「詩学」（一九六八年）には物語内容と物語言説両者の分析が見られる。「ところがふたを開けてみると、物語の文法・論理学・記号論といった内容の分析は、現在までのところほとんど物語論の名を要求してこなかったのであって、それゆえ物語論は物語的様式の分析者たちだけの占有物（一時的な占有かもしれないが）として残されたのである。以上のような方向で物語論を限定することは私には結局のところ正当であると思われる。物語的なものの唯一の特殊性は、その様式にあるのであって、その内容にあるのではないからだ。内容ならば、演劇や図像やその他の『再現［法］』でも充分に事は足りるのである。実のところ『物語的な内容』というものは存在しない。存在するのはただ、いかなる再現の様式でも受け容れる行為または出来事の連鎖だけである」（『物語の詩学』二〇頁）。

ジュネットは「最小の物語言説」という概念を使う。「《私は歩く》とか《ピエールがやって来る》といった程度の言表でも、私に言わせるならば物語言説の最小の形態なのである」（二一頁）。これ以上の内容を要求する説は、「興味を惹く物語内容の形式」なのである。「ところが、物語内容が物語内容であるためには、なにも興味を惹く必要などない」。E・M・フォスターは「物語内容（ストーリー――『王が死にそれから后が死んだ』）と筋（プロット――『王が死にそれから悲しみのために后が死んだ』）との有名な区別を立てた。ストーリーのための時と場所があり、それとは別にプロットのための時と場所がある。フォスターが付け加えて言うには、さらに謎のための時と場までがあるそうだ――『后が死んだ、が、誰もその理由を知らなかった』」。「私の唱える最小の物語言説は、フォスターのストーリーよりもたしかに一層簡素なものであるが、しかし簡素であることは悪いことではない。『王が死んだ』、ただそれだけである。一つの見出しを作るにはこれで充分だと私には思われる」と（『物語の詩学』二

二―二三頁)。

㈢ ジュネットは言う。「どんな物語言説も……一つまたはいくつかの出来事の報告を引き受ける言語的生産物であるのだから、これを文法で言うところの一つの動詞形態が繰り広げる展開過程として、つまり一つの動詞の拡大として扱うことはおそらく正当なのであって、しかもその展開は、どれ程並外れたものであってもかまわない」。「……ほかならぬ動詞の文法から借用してきたいくつかの範疇にもとづいて、物語言説の分析をめぐる諸問題を体系化することは、あるいは少なくとも、それらの問題を定式化する程度のことは、おそらく許されるはずだ。それらの範疇は、本書においては、以下の通り限定関係の三つの基本的クラスに還元されるであろう。まず第一のクラスに属する限定関係は、物語言説と物語世界との時間的諸関係に関連する。われわれはこれを、時間 temps の範疇に組み込むことにする。第二のクラスに属する限定関係は、物語の『再現』の諸様式(種々の形式と度合)、すなわち物語言説の叙法 mode に関連する。第三のクラスに属する限定関係は、われわれが定義した意味での語りそのもの――すなわち語りの状況ないしは審級――、およびそれを支える二人の主要人物、つまり語り手とその現実的もしくは潜在的な相手が、物語言説の中に含まれている仕方に関連する」。人称 personne ではなく、態 voix、つまり、動詞のあらわす行為が、言表行為の主体(より一般的には審級)との関連において示す相を意味する。「時間と叙法はともに物語内容と物語言説との諸関係のレベルで作用し、他方、態は、語りと物語言説との諸関係を示すと同時に、語りと物語内容との諸関係をも示すわけである」。それらは一種の関係群にすぎず、実体的なものではない(二一―二三頁)。

㈣ ジュネットは〈物語内容の時間(erzählte Zeit)〉と〈物語言説の時間(Erzählzeit)〉の区別を認める。「一

切の事物と同様、書かれた物語も時間の中で生産されたものであるが、それは空間の中に存在し、また空間として存在する。そして、この物語を『消費』するために必要な時間は、これを踏破し、通り抜けるのに必要とされる時間のことであり、この点において、道路や野原の場合と変るところはない。物語のテクストは、他のすべてのテクストと同様、それ自身の読みから換喩的に借用してきた時間性以外の時間性を持たないのである」。このような換喩的転位を引き受けることが、物語作用の一部をなしているから、「物語言説の時間……という準虚構を、そのまま受け容れなければならないのである。この偽りの時間は、真の時間と同様の価値を有しているのだから、われわれはこれを、そういう呼び方が同時に含むところの留保と同意とをもって、一つの擬似時間として扱うつもりである[28]」。三つの限定関係に従う。「第一は、物語世界において継起する出来事の時間的順序と、物語言説において布置されたそれらの出来事の擬似時間的な順序との関係である」。「第二は、これらの出来事すなわち物語世界の切片が持つ可変的持続と、物語言説においてそれらの出来事の報告が有する擬似持続（要するにテクストの長さ）との関係である。……最後に、頻度の関係、言い換えるなら（ここでは依然として近似的な言い方で満足しておこう）、物語内容の反復能力と、物語言説のそれとの関係である」と（二七－二九頁）。

㈤　まずは順序である。「ある物語の時間的順序を研究するということは、とりもなおさず、出来事もしくは時間的切片が物語言説において占める布置の順序を、その同じ出来事もしくは時間的切片が物語内容において継起する順序に突き合わせてみることである。もちろんその際には、物語内容における出来事の継起の順序が、物語言説自体によって明示されているか、あるいは何らかの間接的指標からそれが推測可能であるという制限が付く」（二九－三〇頁）。

(i) 錯時法　「このような物語の錯時法 anachronie（物語内容の順序と物語言説のそれとのさまざまな不整合を、本書ではこのように名付けることにする）を探り出し、測定するには、物語言説と物語内容が時間のうえで完全に一致した状態である一種のゼロ度の存在が、暗黙の裡に要請される。この基準となるべき状態は、現実のものというよりもむしろ仮説的な存在である」（二九－三〇頁）。この種のテクストの時間的分析は、テクストの諸切片を、物語内容の時間における位置変化に応じて列挙したり、大きな分節を扱う場合には、細かい点を無視して、最大限の単純化を前提にすることになる。ジュネットはマルセル・プルーストの『失われた時を求めて』の物語言説を分析するのだが、この物語は「鍵となる位置を起点とした広大な往復運動によって始まっている。この起点となる位置は戦略上の支配拠点であって、ほかならぬ位置5（不眠）が、その変異体である5′（マドレーヌ菓子）とともに、その役割を担っていることは明らかである。いわゆる『媒介主体』、つまり不眠に苦しみ、［マドレーヌ菓子による］無意志的記憶の奇蹟を体験した主体の占める位置がまさしくそれなのであるが、彼の思い出こそ物語言説の全体を支配し、それがために位置5－5′がある種の必要欠くべからざる中継点――あえて言うならば物語の発着装置――の機能を負わされることになる」と（四三頁）。

(ii) 射程と振幅　ここでは専ら時間的分析、しかも順序の問題に還元されるそれに限定される。「錯時法というものは、過去であろうと未来であろうと、『現在の』時点から――言い換えるなら、物語言説が中断されて錯時法が姿を現わす物語内容の時点から――、その程度こそさまざまであるが、何がしかの距離を置いたところに位置している。そこで、その両者を隔てる時間的距離を、その錯時法の射程 portée と呼ぶことにしよう。錯時法はそれ自体、程度に差はあれ、ある長さを持った物語内容の持続を覆っている。これを、錯時法の振幅 amplitude と名付け

よう」（四六頁）。

(iii)　後説法　「物語内容の現時点に対して先行する出来事をあとになってから喚起する一切の語りの操作を」後説法 analepse と呼ぶことにする（三五頁）。「ある錯時法を錯時法として定義することがそれとの関連で可能となるような時間的水準に位置する物語言説を、今後、『第一次物語言説』と呼ぶことにしよう」（四七頁）。「……その振幅の全域が第一次物語言説のそれの外側にはみ出す」後説法を「外的後説法」と呼ぶ。「時間域が第一次物語言説のそれに包含されている場合」を内的後説法と呼ぶ（四八―四九頁）。語り手が作中人物として物語内容に登場するか否かによって「等質物語世界的」と「異質物語世界的」を区別する［後述］。外的後説法は第一次物語言説との間に干渉作用が生じる懸念は存在しないが、内的後説法の場合には、干渉の危険がある。異質物語世界的の場合は問題ないが、等質物語世界的の場合には、おそらく避け難いであろう。「第一の範疇を、私としては補完的後説法もしくは『追説 renvoi』と呼ぶつもりであるが、これは、物語言説の過去の部分における欠落をあとになってから満たす回顧的切片を、含むものである。かくして物語言説は、部分的に時間の流れから独立した物語論理にもとづき、一時的な削除、および程度の差こそあれある長さの時間を経過したあとの補填によって編制されることになる。これらの過去の部分における欠落は、純然たる省略、つまり時間的連続の内部に生じた断層にすぎないこともありうる」（五〇頁）。「しかしながらこれらのものとはまた異なった種類の欠落も存在する……」。「……もはやある通時的切片を抜かしてしまうのではなく、原則として物語言説が覆っているはずの時期に含まれるにもかかわらず、問題となる状況の構成要素の一つを削除してしまうわけである」。たとえば、家族の一員の存在の隠蔽。このように、「物語言説は所与の一事実を避けて迂回しているのである」。「黙説法 paralipse」と呼ぶことにする（五

一頁)。等質物語世界の内的後説法の第二のタイプは「反復的後説法」もしくは「再説 rappel」と呼ぶことにしよう(五四頁)。

(iv) 先説法 「あとから生じる出来事をあらかじめ語るか喚起する一切の語りの操作を先説法 prolepse と呼ぼう」(三五頁)。「後説法と同様先説法の場合も、内的先説法と外的先説法の二つに分けることは容易である。第一次物語言説の時間的領域の終点を明確にしるすのは、先説法に置かれていない最後の情景である」。たとえば『失われた時を求めて』では、ゲルマント大公邸でのマチネーがそれである。『失われた時を求めて』の中の幾つかのエピソードはこのマチネーより後のものである。これらのエピソードは外的先説法である。それは「筋を構成する諸系列の一つを、その論理的帰結点に導いてゆくうえで効果を発揮するわけである」(七一―七二頁)。等質物語世界の内的先説法の場合には、「やはり後説法の場合と同様、一つは将来において発生するはずの欠落をあらかじめ充たす先説法(補完的先説法)、もう一つはやがて現われる物語切片を、同じく前もって繰り返す……先説法(反復的先説法)の二つに区別することができる」(七四頁)。「反復的先説法の方は、まさしく予告の役割を演じるわけだ」(七七頁)。それは予測を含まない「布石」「伏線」とは違う(七九頁)。

(v) 空時法 「『失われた時を求めて』の中には、時間的な参照基準を一切奪われた出来事、その周囲を取り巻く他の出来事との関連からどうしても[時間的な]位置を確定することができない出来事もまた、いくつか存在する」。「そこでわれわれは、この種の錯時法を、日付も年代も持たぬ出来事として、要するに空時法として考えなければならないのである」(八九―九〇頁)。

(六) 次は持続 durée である。物語言説の持続を物語内容の持続と比較対照することは、順序や頻度に比べて困難で

ある。それはテクストが文字で書かれていることに由来する。発話される物語言説には、完全に測定可能な固有の持続が備わっているが、書かれた物語言説の場合には、「読みあるいは朗唱といった言語運用の行為を経ない限り『受容』されることはないし、ゆえにまた完全に存在することもない」。「（書かれた）物語言説の擬似時間性という名のもとに私が言わんとしたのは、以上のことがらである」。「二つの持続（物語内容の持続と読みの持続）の比較は、実際には二度の変換を経ておこなわれる。まず物語内容の持続がテクストの長さに変換され、次に、テクストの長さが読みの持続に変換される。だが、第二の変換は、［対話の］情景の等時性を検証しようとする場合以外には、ほとんど重要性を持たない。実を言えば、情景の等時性というのは近似的なものでしかないし、それゆえ約束事としての等時性にすぎないのである」。「……関与的特徴は物語言説の速度である。それゆえに、私は今日では、この章の表題を『持続』とするのではなく、『速度』とするかあるいは――私の想像では、いかなる物語言説も、完全に一様な調子で進行することはないと思われるので――『さまざまな速度』とすべきだったと考えている」（『物語の詩学』三六―三七頁）。「ところで速度は、時間的尺度と空間的尺度の関係として理解される……。言い換えるなら、物語言説の速度は、物語内容の持続――秒、分、時、日、月そして年単位で測られた持続――と、テクストの長さ――行およびページ単位で測られた長さ――との関係によって定義されるということだ。それゆえ等時的物語言説、すなわち仮説上のゼロ度の基準点は、こう考えてくると、加速も減速もない等速度の物語言説、つまり、物語内容の持続と物語言説の長さが常に一定不変の関係を保ち続けるような速度を持った物語言説、ということになろう」。「事実、美的洗練の度合いがどうであれ、いかなる速度の変化も受けつけないような物語言説が存在するとは、想像し難いのである」。「すなわち、物語言説は錯時法を抜きにしても成立しうるが、不等時法 anisochronie

――もしくはこう言った方がよければ（おそらくそうであろうから）、律動効果――を抜きにしては、およそ成立しえないのである」と（九七頁）。

「……現実に看てとれるのは、物語、とくに小説の伝統が、あらゆる可能な選択肢の中から四つの基本的関係を選ぶことにより、この種の自由［つまり速度の自由］を縮小してしまった、あるいは少なくとも、この自由を組織化してしまった、ということである」。「物語の四つのテンポ mouvement」を構成するのは休止法 pause（TH＝Temps d'Histoire 物語内容の時間、TR＝Temps de Récit 物語言説の時間、∞無限大（小）。TR＝n　TH＝0　ゆえに、TR∞＞TH'　速度0）、情景法 scéne（TR＝TH'　等時的速度）、要約法 sommaire（TR＜TH'　可変的速度）、省略法 ellipse（TR＝0　TH＝n　ゆえにTR＜∞TH'　無限大の速度）である（一〇四頁）。

(i)　要約法　これは「［作中人物の］行為や言葉に関する詳細は抜きにして、数日間、数カ月、あるいは数年に及ぶ生活を、わずか数節ないしは数ページで報告する語りのことだ」。要約法は簡略なものであるから、物語の資料体において占める地位は制限される。「要するに要約法は、それらの情景［法］を際立たせる『背景』の役割を演じてきたのであって、だからこそそれは、とりわけ、小説の物語言説の場合、その基本的律動を定めるのは、要約法と情景法の交替にほかならない」（一〇六―一〇七頁）。

(ii)　休止法　ジュネットはバルザック、スタンダール、フローベールにも言及するが、例は専らプルーストの『失われた時を求めて』からのものである。したがって、前述の要約法も休止法もほとんど、見るべき例は存在しないと結論する。

(iii)　省略法　ここで問題とするのは、厳密な意味での省略法、すなわちあくまでも時間における省略法であり、黙

説法は考慮されない。「そこでまず、この［省略された時間の］持続が指示されているのか（限定的省略法）、指示されていないのか（非限定的省略法）を知ることが、第一の問題となる」。「形式の観点からみるならば、省略法は次のように区別できよう。(a)明示的省略法。……この種の省略法はまず、それが省略した過去の時間を指示することがある（その指示は限定的であると非限定的であるとを問わない）」。この点で省略法は「何年かが過ぎ去った」という要約法に類似してくる。「第二に明示的省略法は、完全な省略をおこなったのちに（この時省略法のテクストはゼロ度を示す）、物語言説が再開された時点ではじめて、経過した時間を指示することがある」。また純然たる時間的指示だけでなく、たとえば、「幸福な数年ののち」のように、物語世界に関する情報を盛り込むこともできる（被修飾的省略法）。「(b)暗示的省略法。これは要するに、テクストにおいてその存在そのものが明示的でない省略法のこと」である。「(c)最後に、省略法の中でももっとも暗示的な形式を持つものとして、純粋に仮説的な省略法、すなわち期間の限定はおろか、どこかに位置を定めることさえ時として不可能であるような省略法を、挙げておかなければなるまい」。この場合は、後で明らかにされない限り、その存在さえも分からない。物語言説の一貫性の保持の限界であり、時間分析の有効性の限界である（以上、一一七―一二一頁）。

(iv)　情景法　『失われた時を求めて』に先立つ小説作品においては、「……小説規範の真の律動――『ボヴァリー夫人』ではなお充分に感知できる律動――を生み出すのは、［読み手の］期待感をかきたてつつ［物語を］繋ぎ合せてゆく機能を持った非劇的な要約法と、筋において決定的な役割を演じる劇的な情景法との交替にほかならない」。ところが『失われた時を求めて』のそれは、それぞれの新しい場所（もしくは環境）への主人公の登場をしるす、「典型としての、ないしはサンプルとしての情景法にほかならない」。つまり、プルーストの情景法は、「あら

ゆる種類の付随的な情報や状況がそこに収斂するところの、言わば『時間的焦点』、ないし磁極としての役割を演じるのである。かくしてプルーストの情景法は、回顧、予想、括復的・描写的な挿話、情報提供を目的とした語り手の介入等の、あらゆる種類の逸脱でふくれあがり、隙間なくふさがることになる」と(以上、一二一－一二三頁)。

(七) 時間性の第三の範疇は頻度 fréquence である。「……『同一の出来事』あるいは『同一の出来事の反復』というふうにここで言われるものは、相互に類似した、そしてまた、もっぱらその類似性においてのみ考察の対象とされた、いくつかの出来事からなる連続であるということだ」。「言表の場合もやはり、同一性つまり反復は、抽象化にもとづく事象である。言表の生起はどれ一つとして、他のものと物質的に(ということは音声的もしくは書字的に)完全には同一ではない」。

(i) 単起法／括復法　四通りの頻度の関係について述べよう。①「一度生起したことを一度だけ物語る場合(つまり数学の公式を真似て省略的に表現するならば、1R／1H)」。これを「単起的物語言説 récit singulatif と呼ぶことにする。②「n度生起したことをn度物語る場合(nR／nH)」。これは対応的な単起法 singulatif anaphorique である。③「一度生起したことをn度物語る場合(nR／1H)」。これを「反復的物語言説 récit rpétitif」と呼ぶ。④「n度生起したことをただ一度だけ物語る(あるいはむしろ、ただの一度で物語る)場合(1R／nH)」。このような場合には、たとえば「毎日」あるいは「その週は毎日」のように、共説的な表現を普通、用いる。「括復的物語言説 récit itératif」と呼ぶ(以上、一二九－一三三頁)。

単起的な情景の内部に括復法が挿入されている場合に、括復法が覆う時間域が情景の時間域を越えて外にはみ出すタイプを「敷延的括復法 itération généralisante もしくは外的括復法 itération externe」と呼び、はみ出さない

タイプを「内的括復法 itération intérne もしくは総合的括復法 itération synthétissante」と呼ぶことにする。文法上一応は括復的なものとして提示されている情景であるが、「細部がいかにも詳しくかつ正確に書き込まれているために、その情景が、いかなる変化も伴わず、そこに語られているままの形で何度も生起したとは、どんな読み手にも本気では信じられないという点」で、擬似括復法と呼ぶべきものがある（一三五―一三九頁）。プルーストの『失われた時を求めて』における空間的感性の単起的傾向と時間的感性の括復的傾向を指摘することができよう。

(ii)　境界限定・周期特定・延長　「あらゆる括復的物語言説は、ある数の単一の単位によって構成された一つの括復的系列の内部で繰り返し生起したもろもろの出来事を、総合的に物語ったものである」。たとえば、「一八九〇年夏のすべての日曜日。この系列は、およそ一二箇の現実の単位から構成されている。この系列を明示するのは、まず第一に、その通時的境界（この系列は一八九〇年の六月末に始まって、九月末まで続く）であり、第二には、その構成単位が反復生起する周期、つまりこの単位が七日に一度の割合で反復するという周期である。われわれは、この第一の弁別特徴を境界限定 détermination と呼び、第二の弁別特徴を周期特定 spécification と呼ぶことにしたい。そして第三に、構成単位のそれぞれが持つ通時的振幅を、したがって、構成された総合的単位が持つ通時的振幅を、延長 extension と呼ぶことにしよう」（一四七頁）。

物語言説を具体化するために、括復的系列の内的境界限定と内的周期特定が提供する多様化の諸手段が介入して来る。「……境界限定が指示するのは、ある括復的系列の外的境界ばかりではない。境界限定はまた、その系列の含むもろもろの段階を明瞭に区別すると同時に、その系列をさらにいくつかの下位系列に分割する機能をも有している」。たとえば、二人の人物の決裂前と決裂後。「内的境界限定から得られたもろもろの変異体もやはり括復法に

属するということを、強調しておきたい」。「……内的境界限定とは、ある括復的系列の内部に、いくつかの単起的な部分を区別してゆく手法ということになる。これとは逆に、内的周期特定の方は、多様化のための純粋に括復的な手法なのである。なぜなら、この手法の目的はもっぱら、反復を下位区分することにより、交替関係（この関係は必然的に括復的となる）にある二つの変異体を獲得することに尽きるからだ」。『失われた時を求めて』の散歩の反復法則を分節する「好い天気／悪い天気」、あるいは「ある時は／またある時は」（一五〇－一五四頁）。

(iii) 内的通時性と外的通時性　「……現実の通時性（定義上、単起的である）が介入してくるとしても、それは、構成系列の境界を画するためであるか（境界限定）、もしくは構成された単位の内容を多様化するためにすぎなかったのであって（内的境界限定）、時間が推移した跡をありのままにこの単位に刻みこむこともなければ、単位そのものに時間の経過を経験させることもなかった。前とか後とかいうのは、所詮われわれにとっては、言うなれば同一テーマの二つの変異体にすぎなかったのである」。「けれども、括復的な物語言説はまた、内的境界限定の作用により、現実の通時性を顧慮することがありうるばかりか、この通時性を括復的言説自身の時間的進行にとりこむこともありうる」。「かくして必然的に提起されてくるのが、内的通時性（総合単位［つまり物語言説自体］の通時性）と外的通時性（現実的系列の通時性）との関係をめぐる問題であり、同時にまた、それら二種類の通時性の間に、場合によっては生じうる干渉の問題である」（一六二－一六四頁）。

(iv) 交替・移行　「……『失われた時を求めて』における物語言説の律動を根本から支えているのは、古典的な物語言説の場合とは異なって、要約法と情景法との交替ではもはやなく、別の交替、すなわち括復法と単起法との交替ということになる」。この交替は機能上の従属の体系と関連するのだが、第一は、単起的な情景法に従属した（そ

して通常はその中に挿入された）、描写的ないしは説明的な機能を持つ括復的切片であり、第二に、括復法の展開に従属した、例証的な機能を持つ単起的な情景法である。「なるほど『失われた時を求めて』には、何か『コラージュ』のような、あるいはむしろ、『パッチワーク』のようなところがある。そして、この作品の物語言説としての統一性は、プルースト自身の比較によれば、『人間喜劇』や『ニーベルンゲンの指輪』のそれと同様、事後的な統一性なのであって、こうした統一性は、それがあとになってから与えられるものであるだけに、そしてまた、さまざまな素材――その出所と時代に制限はない――から苦心して構成されたものであるだけに、一層きびしく要請されるのである」と（一六六―一七二頁）。

(v)　《時間》との戯れ　総括的に一言述べねばならない。説明の必要上、種々の現象を分離して扱ったが、「それらの現象は、事実の上では緊密な相互関係を保っているのである。たとえば、伝統的な物語言説に関する限り、後説法（順序の事象）は要約法（持続すなわち速度の事象）の形式を採るのが通例であるし、その要約法もまた、えてして括復法（頻度の事象）の助力を求めることになりがちなのである」。「……記憶とは、まず第一に（通時的なものである）時代（ペリヨド）を（共時的なものとしての）時期（エポック）に還元し、出来事を情景に還元すると同時に、第二として、これらの時期や情景を排列するに際しては、それらの時期や情景の順序ではなく、記憶自身の順序に従うのである。媒介主体の記憶の活動は、それゆえ、物語世界の時間性から物語言説を解放するための一要因（むしろ一手段と言ってもよかろう）ということになる」。プルーストの『失われた時を求めて』の「この歪曲作用［つまり、巨大な省略法・並外れた情景法］は、もはや媒介主体のそれではなく、直接的に語り手の歪曲作用なのであって、この時の語り手は、ますます募りゆく焦燥と不安に苛まれながら、自己の最後の情景に破裂寸

前まで詰めこめるだけのものを詰めこむ――ちょうどノアが自分の方船にそうしたように――ことを望むと同時に、ついに彼を語り手として存在せしめ、その言説を正当化してくれるはずの大団円……に向かって跳躍することを願っているのだ」。われわれは物語言説の時間性ではなく、それを最後の審級において支配する時間性、つまり語りそのものの時間性に関わることになる。プルーストの主人公は、「時間の外」に逃れることと「《時間》の内部」にはいりこむことを同時に望んでおり、その矛盾した意図が、挿入・歪曲・圧縮という形で現れている。プルーストの小説は確かに、失われ、見い出された《時間》の小説であるが、「けれどもそれはまた、たしかにより暗々裡にではあるにしても、支配され、囚われ、魅せられ、ひそかに顛覆された《時間》の、あるいはもっと的確には、倒錯した《時間》の小説でもあるのだ」と（一七八―一八四頁）[28]。

(八) 時間性の範疇の次に問題になるのは、「叙法」である。「物語叙法 mode narratif とは、物語言説における、物語内容の「再現（ルプレザンタション）」の諸様態、そのさまざまな形式と度合を扱う。換言すれば「物語情報の制御」の諸様態を扱う（一八七―一八八頁）[30]。

(i) 距離 distance 「物語言説は、より多くのもしくはより少ない詳細を、より直接的もしくはより直接的でない仕方で読み手に提供しうるのであり、かくして物語言説は（あまり文字通りの意味には解さないという条件を付したうえで、一般的で都合のよい空間的隠喩を踏襲するなら）、自己の物語る対象との間に、より大きなもしくはより小さな距離を置いているように思えるわけだ。物語言説はまた、もはや一様な選別によるのではなく、その物語内容のしかじかの引き受け手（一人の作中人物もしくは作中人物のグループ）の認知能力に応じて、自己の伝える情報を制御することを選びうる」（一八八頁）。「距離の範疇」は「物語情報の量的な変調（『どのくらい？』）を扱

う（『物語の詩学』四六頁）。

「……ディエゲーシス［diégésis］とミメーシス［mimésis］の対の等価物として提出可能な唯一のものは物語言説／対話（物語的叙法／演劇的叙法）であり、したがってディエゲーシス／ミメーシスの対立を物語る［telling］／示す［showing］と翻訳することは絶対に許されないのである」（『物語の詩学』四八頁）。「実際、演劇的再現とは異なり、どんな物語言説であろうと自己の語る物語内容を、『示すこと』や『模倣すること』はできない。口頭によるものであれ書かれたものであれ、物語るという行為が言語的事象であり、また言語は意味作用をおこなうのであって模倣するわけではないという唯一にして充分な理由のために、物語言説に可能なことと言えばそれは、詳しく・正確に・『生き生きと』物語内容を語ること、そしてそれゆえに、ミメーシスの錯覚――これこそが物語の唯一のミメーシスにほかならない――をさまざまな度合で与えることに限られる」からである（一九〇頁）。「かくしてディエゲーシス／ミメーシスの対立は、出来事／言葉という分類に帰着し、そのうえで次のように一段とたしかな基盤にもとづいて細分化される。すなわち、言葉についての物語言説の場合は、言説の再生産における逐語性の度合に応じてであり、そして出来事についての物語言説の場合は、ミメーシスの錯覚を生じさせる若干の手法への依存度（あるいはもっと曖昧な言い方になるが、そうした若干の特徴の存在の度合）に応じてである」。それらの特徴は次のものであり、列挙した順序でミメーシスの錯覚を惹き起こす効果が増大する。①いわゆる語りの審級の消滅。これは態の事象に関連する。②物語言説の詳細な性格。これは速度の事象に関連する。③最後に、これらの細部は機能的に無用だと思われるほど、より大きな「錯覚」を生み出す（『物語の詩学』四八―四九頁）。

(ii)　出来事についての物語言説　「……出来事についての物語言説は、その叙法がどうであれ、やはり物語言説で

あることに変りはない。換言するなら、それは非言語的な（と見做された）ものの言語的なものへの転写ということだ。ゆえにそのミメーシスはあくまでミメーシスの錯覚でしかないのであって、こうした錯覚も、およそ錯覚というものの例にもれず、発信者と受信者の間のすぐれて可変的な関係に左右されるわけである」。人によって受け取り方が違い、時代的変遷もある（一九二頁）。

「『示すこと』は、ある語り方以外のものではありえず、そしてその語り方とは、物語対象について最大限のことを語ると同時に、しかも語っているというそのことについては最小限にしか語ろうとしない、という点にある」。「示すこと」は①情景の優位、②語り手が擬似的な透明性を維持することの、二つの連関し合った基本原理に基づいている。ジュネットはこれを〈情報＋情報提供者＝一定〉という公式で表す。これは上に述べた〈ミメーシスの錯覚〉を生み出す特徴と一致するが、プルーストの場合には、物語内容への配慮から解放された語りがあることから、「語る（telling）」というよりも、単に「話すこと（talking）」と呼んだ方が適切な場合があり、しかも、語り手は決して姿を消さないことから、この公式には合わないと言う（以上、一九三―一九六頁）。

(iii) 言葉についての物語言説　「……作中人物の（発話された、もしくは『内的』な）言説の以上三つの状態は、語りの『距離』というわれわれの目下のテーマにそれらを関連させるならば、次のように区別されることになろう。①物語化された――もしくは物語られた――言説は、明らかにもっとも距離の大きな状態であり、……［出来事への］還元度がもっとも高い状態である」。たとえば、「私は母に、アルベルチーヌと結婚する決意を伝えた」あるいは「私はアルベルチーヌとの結婚を決意した」。「②間接話法によって転記された言説。たとえば、「私はどうしてもアルベルチーヌと結婚しなければならないのだ、と私は母に言った」。「③もっともミメーシス的な形式」、「再現

された言説」である。たとえば、「私は母にこう言った（または、私はこう考えた）――《私はどうしてもアルベルチーヌと結婚しなければならないのだ》と」。演劇タイプに属する（一九九―二〇一頁）。

「《歴史》・伝記・自伝は、実際に述べられた言説を再生産すると見做されるのに対して、叙事詩・長編小説・中編小説は、再生産を偽装する――つまり現実には、完全に作りごとである言説を生産する――と見なされる。見なされるとしか言えないのは、こうしたことがジャンルの慣習にすぎないからであり、むしろ必ずしも現実とは一致しないからだ」。「……言説の生産という虚構に固有な行為は、虚構上の再生産にひとしいことになる。そして、そのようなものとしての再生産は、真の再生産と同じ約束に虚構のうえで則り、同じ困難を虚構のうえで生じさせることになる」。ここで約束とは引用符は逐語的な引用を示すこと、間接話法の補足節ではより自由度があることなどであり、困難とは翻訳の場合には逐語性が損なわれること、口頭表現から書記表現への移行は発話行為に伴う特殊性（たとえば、口調・抑揚）が中和されることなど。以上の制限は「再現された言説」にしか作用しない。残りの二つは「再現された言説」と同一の〈ミメーシス性〉、

叙法／対象	語り手の言説	作中人物の言説
出来事	第一次物語言説	第二次物語言説
言葉	物語化された言説 と 転記された言説	再現された言説 と 転記された言説

つまり逐語性を目指してはいないからである（『物語の詩学』五二―五四頁）。

「物語言説は物語内容を語るものであるから、もっぱら出来事だけを対象としている。ただ、出来事の中には言葉から成っているものもあり、その場合に限って物語言説は例外的に――やや趣を異にして――、それらの言語的な出来事を再生産することがあるわけだ」と（『物語の詩学』六五―六七頁）。

(iv) パースペクティヴ perspective 「『誰が見るのか？』という問い（叙法の問題）と『誰が語るのか？』という問い（態の問題）の区別は、少なくとも原理上は今日広く認められている」（『物語の詩学』六八頁）。従来、「視点」、「視野」あるいは「視像（ヴィジョン）」と呼ばれていた。ジュネットは視覚性を払拭すべく、「焦点化 focalisation」という、さらに抽象度の高い術語を提唱する。先の問いをもっと広い意味を持つ「誰が知覚するのか？」という問いに替えることが必要であり、しかも焦点位置が一つでも存在する場合に、一人の作中人物の位置と常に同一であるとは限らないから、もっと中立的な問い、「どこに知覚の焦点があるのか？」を立てるべきである（『物語の詩学』六八―六九頁）。パースペクティヴは「物語情報の質的な変調（『何を仲介として？』）を制御する」（『物語の詩学』四六頁）。ジュネットは「種々の古典的概念を比較検討し、体系化」して、次のように言う。①『全知の語り手による物語言説』［≪語り手＞作中人物≫、すなわち、語り手は作中人物よりも多くのことを知っている、もっと正確には、語り手はどの作中人物よりも多くのことを語る］あるいは『背後からの視像』を焦点化ゼロ、すなわち、物語言説はいかなる制限的な視点も採用しない。②『視点のある、反射人物のいる、選択的全知の、視野の制限された物語言説』［≪語り手＝作中人物≫、語り手は、ある作中人物が知っていることしか語らない］あるいは『ともにある視像』を内的焦点化、すなわち、ある作中人物の視点を通して物語世界が喚起される。③『客観的、行動

主義的な技法』［《語り手＜作中人物》、語り手は作中人物が知っていることよりも少なくしか語らない］あるいは『外からの視像』を外的焦点化、すなわち、物語言説の対象となる作中人物が、外部の証人の視点から語られる。以上のように整理したと（二二一－二二七頁。『物語の詩学』六九－七〇頁）。

内的焦点化の物語言説は一人称に翻訳できるか否かが基準となるのだが、さらに三つに分かれる。第一は、内的固定焦点化である。ある作中人物の視点を一貫して守る。第二は、内的不定焦点化であり、視点を移動させながら物語内容を語り進める。第三は、内的多元焦点化であり、映画『羅生門』のように、それぞれの視点で同一の出来事を何度も喚起する（二二二・二二六頁）。

(v)　変調 altération　「……焦点化の変化は、とくにそれが一貫した文脈の中で孤立して現れる時、その文脈を支配するコードへの一時的な侵犯として分析しうる。勿論、そのような侵犯がなされるからといって、支配的コードの存在そのものが問題視されることはない［もっと正確に言えば、支配的コードが維持される場合だけが取り上げられる］……」。「これらの孤立して現れる侵犯を、一般に変調……と呼ぶことにしよう」。「考えうる二つのタイプの変調としては、まず第一に、全体を支配する焦点化のコードにおいて原理的に要求されるよりも少ない情報しか与えないタイプのものと、第二に、同じくその支配的コードにおいて原理的に許されているよりも多くの情報を与えるタイプのものとがある。第一のタイプは「黙説法 paralipse」であり、たとえば、アガサ・クリスティの『アクロイド殺害事件』で、殺人犯の思考から殺人の記憶だけを取り除いておく場合。第二のタイプは「冗説法 paralepse」であり、看過すべきことを報告する場合である（二二七－二三二頁）。

(vi)　多調性　「……『失われた時を求めて』という作品がきわめて的確に例証するのは、すべての侵犯（黙説法と

冗説法）がそれとの関連から変調と定義されるような音階法（もしくは音調法）と、もはやどのようなコードも優位性を持たず、侵犯という概念自体がすでに通用しなくなるような無音階法（無調法？）との間に介在する、ある種の中間的な状態にほかならないのだ、と」。それは一九一三年という同じ年に『春の祭典』が創始した多音階法（多調法）にも比し得る。「もっとも、プルーストの物語言説のこうした特徴を、多調性 polymodalité と呼びたくなるのは事実である」。もっとも、プルーストの『失われた時を求めて』の叙法の全実践が、ことさらに無秩序な語りの姿勢によって特徴づけられているのであると（以上、二三二―二四六頁）。

(九) 最後は、態である。態とは「動詞のあらわす行為が主語との関連において示す相」である。「ただしここで言う主語とは、単に、その動作を遂行する、もしくはその動作を受ける主体であるばかりか、その動作を報告する主体（文法上の主語と同じ主体であろうと別の主体であろうと、かまわない）でもあるし、場合によっては、たとえ受動的にであろうとこうした語りの活動に参加する、すべての主体をも意味する」。つまり、「物語言説の生産の審級を問題にする」わけで、ジュネットはそのために「物語行為 narration」という術語を用意する。「実際、一方では、……物語の言表行為の諸問題は『視点』のそれに還元され、他方では、語りの審級は『書記（エクリチュール）』の審級と、語り手は作者と、そして物語言説の受け手は作品の読み手と、それぞれ同一視されるといった具合なのである。もちろん歴史的な物語言説とか、あるいは現実の自伝であれば、このような混同にも一理はある。しかし虚構の物語言説となれば、語り手そのものが一つの虚構の役割――たとえ作者自身が直接この役割を引き受けている場合にせよ――であり、しかも想定される物語状況［後述］は、その状況に関連する書記行為（もしくは口述行為）とまるで異なったものでありうるがゆえに、この種の混同は不当なのだ」（二五〇―二五一頁）。

(i)　語りの時間 temp de narration　ジュネットは言う。西洋文化に属する「文明語」では物語を語る際の場所については明確にする必要がないが、語りの審級の時間的限定をなしで済ますことはできない。「私がその物語内容を語る以上、必然的に、現在か、過去か、もしくは未来のある一時点にそれを置かなければならないからだ」と。「語りの審級についての主要な時間的限定」には次の四つのタイプが区別される。「まずは後置的なタイプである（過去形で語られた物語言説における古典的な位置であり、この位置こそおそらくは、はるかな昔からもっとも多用されているものである）。第二は前置的なタイプである（この予報的な物語言説は未来形で語られるのが普通であるが、しかし『救われたモーゼ』におけるジョカベルの夢がそうであるように、これを現在形で語ったとしても一向に差し支えはない）。第三は同時的なタイプ（物語られる行為と同じ時点に位置する、現在形で語られた物語言説）で、第四が挿入的なタイプである（物語られる行為の諸時点の間に挿入される）」（二五三―二五四頁）。

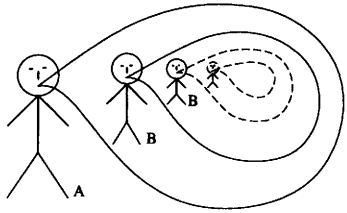
「同時的もしくは挿入的な語りは、語りの持続および、その持続と物語内容のそれとの諸関係を必須の前提とするが、これとは反対に、後置的な語りは次の逆説によって成立している。すなわち後置的な語りには、時間的状況（過去の物語内容に対する）が含まれていると同時に、それは固有の持続を持たないのだから非時間的な本質もまたそこには存在する、という逆説である」（二六〇頁）。

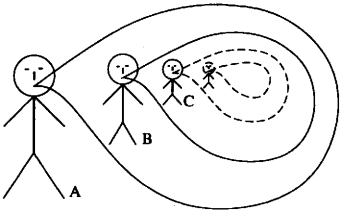
(ii)　語りの水準 niveaux narratifs　「……ある物語言説によって語られるどんな出来事も、その物語言説を生産する語り行為が位置している水準に対して、すぐうえの物語世界の水準にあるのだ、と。ルノンクール氏によるその虚構の『回想録』の執筆は、第一次の水準で遂行された（文学的）行為であるから、この水準を物語世界外 extra-diégétique の水準と呼ぶことにしよう。そしてこの『回想録』の内部で物語られるもろもろの出来事（デ・グリュ

ーの語り行為を含む）は、この第一次の物語言説に含まれているので、それらの出来事を物語世界 diégétique の――あるいは物語世界内 intradiégétique の――出来事と呼ぶことにしよう。さらに、デ・グリューの物語言説、つまり第二次の物語言説の中で語られた出来事であるが、これはメタ物語世界 métadiégétique の出来事と言われることになろう」（二六七頁）[31]。

「これらの水準の諸関係をもっとも雄弁に図示するには、こま割り漫画の場合と同様、吹き出しの形で台詞を話す人物画を利用して、物語言説のこうした入れ子関係をあらわしてみるとよかろう。物語世界外の語り手（語り手であって作中人物ではない。もし作中人物であれば何の意味もなさないことになる）であるAなる人物（たとえば『千夜一夜物語』の第一次の語り手）が、まず吹き出しを生産する。これが第一次物語言説で、その物語世界の内部に物語世界（内）の作中人物B（シャハラザード）がいるわけだ。そして今度はこの作中人物が語り手となって――物語世界内である点に変りはない――、メタ物語世界の物語言説を語る。そしてその内部に、メタ物語世界の作中人物C（シンドバッド）が現れるということになり、時にはこの作中人物Cがさらに……と続いてゆくのである」。

「『マノン・レスコー』を例に採るなら、物語世界内の語り手とメタ物語世界の作中人物は同一の人物、すなわちデ・グリューであ［る］……。この状況は……図式……において、指示記号Bが二度繰り返されることによって象徴されよう。記号Aは、もちろん物語世界





外の語り手ルノンクールを指し示す」（図と含めて、『物語の詩学』八九―九〇頁）。

(iii)　メタ物語世界の物語言説　ジュネットは、メタ物語世界の物語言説をそれが挿入されている第一次物語言説に結び付けうる関係についての類型論を、ジョン・バースの類型論を考慮して修正する。①説明的機能（メタ物語世界の後説法による）。②たったいまふと思いついた機能、すなわちメタ物語世界の先説法が果たす予報的機能。この種の先説法が指示するのは、もはや物語世界をそのような状況に至らしめた過去の原因ではなく、その後の帰結なのである。③純粋のテーマ論的機能。入れ子構造というのはこの機能のきわめて顕著な変異体にすぎない。④説得的機能。バースの「演劇的」なタイプ。⑤気晴らしの機能。⑥妨害の機能。議場での議事妨害の場合のように、全く無意味な言葉を発する行為でもかまわない。⑤と⑥の場合、「その機能は二つの物語世界を結ぶテーマ論的関係に依存しているのではなく、語る行為そのものにかかっている、ということだ」と（二七一―二七四頁。『物語の詩学』九八―九九頁）。

(iv)　転説法 métalepse　「ある語りの水準から別の語りの水準への移行を保証するものは、原理的に、語り以外に存在しない。何らかの言説を用いて、ある状況についての知識をもたらすのが、まさに語りの行為であるからだ。語り以外の移行形式はすべて、そのどれもこれもが必ずしも不可能であるというわけではないにしても、少なくとも常に違犯したものとなる」。「われわれとしては、この種の違犯のすべてを示すために、転説法［語りの転位法 métalepse narrative］という術語を用いることにしよう」。「転説法においてもっとも衝撃的に思われる点は、受け容れ難くはあるがなかなかに根強い以下の仮定の中にある。すなわち、物語世界外はおそらく、つねにすでに物語世界なのであり、語り手とその聴き手たち――つまりわれわれ――は多分、やはり何らかの物語世界に属している、

という仮定である」。「メタ物語世界の中継[語り手]は、言及されていると否とにかかわらずただちに排除されて、第一次の語り手だけが残されることになる。そしてそのことが、語りの水準を一つだけ（時には複数のこともあるが）節約する結果となるのであるが、われわれはこういった形式のものを、還元された（もちろん物語世界に、というのが省略されている）メタ物語世界、もしくは擬似物語世界と呼ぶことにしよう」（以上、二七四―二七八頁）。

(v) 人称 personne 「語り手はいつでも語り手として物語言説に介入できるのだから、どんな語りも、定義上、潜在的には一人称でおこなわれていることになる」。「真の問題は、自分の作中人物の一人を指し示すために、一人称を使用する機会が語り手にあるのかどうかを知ることなのである。それゆえ、ここで物語言説は、以下の二つのタイプに区別されよう。第一のタイプは、語り手が自分の語る物語内容の中に登場しない場合……で、第二のタイプは、語り手が自分の物語内容の中に、作中人物として登場する場合である」。（第一のタイプは三人称の物語言説であり、第二のタイプは一人称のそれである（『物語の詩学』一〇三頁）。「私としては、いくつかの明白な理由から、第一のタイプを異質物語世界の物語言説と呼び、第二のタイプを等質物語世界の物語言説と呼ぶことにする」。等質物語世界のタイプは、①語り手が自分の物語言説の主人公である場合と②語り手が二次的な役割――大抵は観察者と証人の役割――の場合に分けられる。「われわれとしては、第一の種類（言わば、より強度の等質物語世界をあらわすもの）を自己物語世界的 autodiégétique という術語――まさに恰好の術語だ――であらわすことにしよう」と（以上、二八七―二八九頁）。「……作者の審級と、語り手の審級と、行為者の審級とが、虚構のうえで、つまり人物像として分離したケースを構成している……。たとえば、主人公が作者『である』ことは誰もが知っているけれども――もしくはすぐに見抜けるけれども――、採用された語りのタイプは、語り手が主人公でないかのように

みせかける、といった場合がそうだ。だとすれば、この場合、異質物語世界的自伝 autobiographie hétérodiégétique という言い方をしなければならないことになるだろう」。「このように諸審級が人物像として分離している場合、私の意見では、二通りの……可能な読みが避けられないことになる。第一の読みによれば（読み手は次のように知覚する）、作者は、明らかに自分自身のことを語りつつ、他人のことを語っているかのようなふりをする……。第二の読みによれば（読み手は次のように知覚する）、やはり自分自身のことを明らかに語っていながら、作者は、その語っている当人が別の人物であるかのようなふりをする」と（『物語の詩学』一一三頁）。

ジュネットは言う。「私がおこなった態転換に関する現実もしくは想像上の種々の実験から、私は、以下の5点を確信するに至った。①選択された態の使用上の柔軟性は、叙法面での帰結という観点からすれば、それらの選択をほとんど等価なものとする。②原理的に避けられない唯一の帰結とは、ある作中人物を態の主体としたあとで（つまりその作中人物に対して予備焦点化をおこなったあとで）別の人物に対して焦点化をおこなうことは不可能である、ということだが、これとても、程度の差こそあれ、巧妙な冗説法の侵犯によって回避することが可能である。③それゆえ、ジェムズやラボック、およびその他の人々が正しくみていたように、異質物語世界的な語りは、当然のこととして、また侵犯に頼らずとも、等質物語世界的な語りよりも多くのことが可能である。④しかしながら、周知の通り芸術家というものは、鎮静的な効力しか持たない自由よりも、拘束から生じる不便さの方を好むということが常にありうる。⑤最後に、態の選択が重要である所以は、叙法や時間のレベルでのどんな利点もしくは難点とも無関係であり、単にそうした選択が存在するという事実そのものにある、と考えてよいだろう」（『物語の詩学』一一九頁）。

(vi) 語り手の機能　「どのように物語言説であれ、語り手の境位を定義するにあたって、その語りの水準（物語世界外か物語世界内か）と、物語内容に対する語り手の関係（異質物語世界かそれとも等質物語世界か）とに同時に着目するなら、語り手の境位は……縦軸と横軸からなる相関表により、四つの基本的タイプとしてあらわすことができる。①異質物語世界外のタイプ。範列――自分自身は登場しない物語内容を語る第一次の語り手ホメーロス。②等質物語世界外のタイプ。範列――自分自身の物語内容を語る第一次の語り手ジル・ブラース。③異質物語世界内のタイプ。範列――自分自身は概して登場することのないいくつもの物語内容を語る第二次の語り手シャハラザード。④等質物語世界内のタイプ。範列――自分自身の物語内容を語る第二次の語り手である、第九歌から第一二歌までのオデュッセウス」（二九二頁）。聴き手が主人公と一致する場合、つまり「二人称の語り」の状況も、異質物語世界的な語りの変異体にほかならない。「定義上、一人称ではない（一人称である理由を持たない、もしくはそういう理由を持たないふりをする）すべての語りは、異質物語世界的なのである。ただし、私の外部には、彼や彼女や彼らしか存在しないわけではない。きみやあなた（たち）もまた存在するのである。この機会を利用して、単数の人称しか考察の対象としないのが誤りであることを指摘しておくのもよかろう。二人称もしくは三人称の複数に置かれた物語言説も存在するのであって、それらはやはり異質物語世界的なのである。一人称複数の物語言説も存在するのだが、このケースはさらに複雑であるように思われるかもしれない。……ところがこのケースは少しも複雑ではない。というのも、ある物語言説が等質物語世界的であるためには、ワレ ego が作中人物としてその物語言説に存在していればそれで充分であるからだ」（『物語の詩学』一四一―一四二頁）。

ジュネットは語り手の機能について次のようにまとめる。「物語の相のうち、第一のものといえば、それは明ら

かに物語内容であり、これに関係する機能が、固有の意味での語りの機能 fonction narrative にほかならない。そして、いかなる語り手であれ、ひとたびこの機能から逸脱したなら、その途端に語り手の資格を失わざるをえないし、もちろん語り手としては、自己の役割をひたすらこの機能だけに絞ることもできる――現にアメリカの小説家の中には、そのような試みを実行としたものもいるのだ。物語の第二の相は物語のテクストで、語り手は、言わばメタ言語的な（この場合だと、メタ物語的な）言説の内部に身を置いて物語テクストに関説することがあるが、それはとりもなおさず、その物語テクストの分節・関連・相互関係、つまりその内的組織を示すためである。ジョルジュ・ブランが『管理のための指示』と呼んでいた言説のこれらの『組織子』は、管理の機能 fonction de régie と名付けうる第二の機能に属している。物語の第三の相は物語状況そのものである。これに関与する二人の中心人物のうち、一人は――存在するにせよ不在もしくは潜在的であるにせよ――聴き手であり、他の一人は語り手自身である。こうした聴き手への指向、つまり聴き手との間に何らかの接触なり対話なりを……確立し、これを維持しようという配慮に照応するのは、ヤーコブソンの『交話』の機能（接触を確認する）と『動能的』機能（受け手に働きかける）とを同時に連想させる機能だ。……そして、この種の語り手たちがとりわけ果たすことの多い機能は、おそらくコミュニケーションの機能 fonction de communication と呼んでしかるべきなのである」。「最後になるが、語り手の自分自身に対する指向が限定するのは『心情的』機能とヤーコブソンが呼んでいる――いささかぎこちない呼び方ではあるが――ものときわめて相同的な機能である。というのもこの機能は、自分の語る物語内容に対して語り手が、語り手としてどのような役割を演じているのか、また、語り手は物語内容との間にどのような関係を保っているのかを、説明するからだ。その場合の関係はもちろん情意面での関係であるが、しかしまた、それは精

神的もしくは知的な関係でもあって、端的には一つの証言という形式を採りうる。たとえば語り手が、自分の情報の源泉や、自分自身の回想の正確度、あるいはしかじかのエピソードが自分の心中に目覚めさせる感情を指示したりする場合が、この種のケースに当たる。だとすれば、この機能を証言の機能 fonction testimoniale、もしくは証明の機能 fonction d'attestation と呼んでも差し支えはあるまい。けれども、物語内容に対する語り手の直接的もしくは間接的なもろもろの介入は、物語られる行為についての権威ある注釈という、より教訓的な形式をも採りうるのである。ここにおいて、語り手の思想的機能 fonction idéologique[32] とでも呼びうるようなものが、はっきりと浮かびあがってくる」。「すでに別のところでわれわれはプルーストの語り手が果たしている物語外的諸機能の種々の現われ――読み手への話しかけ・予告や再説による物語言説の組織化・源泉の指示・記憶の証明――について論じたことがある……」。『作者が語る』(auctorial) という術語の意味するところは、「(現実もしくは虚構の) 作者の存在であると同時に、そのような存在が作品中で身に帯びる至上の権威である」(以上、三〇〇―三〇四頁)。

(vii) 聴き手 「物語世界内の語り手には、物語世界内の聴き手が照応する」。「これと反対に物語世界外の語り手は、物語世界外の聴き手しかその相手となしえない。そして、この物語世界外の聴き手は、この場合、潜在的な読み手に一致するのであって、現実のそれぞれの読み手は、かかる聴き手と同一視されうる。この潜在的な読み手は、原理的には不確定である」。「……物語世界内の聴き手の存在が、結果的に、語り手とわれわれとの間に聴き手を常に介在させることによって、われわれを [物語世界内の語り手から] 遠ざけていることとくらべるならば、[物語世界外の] 受信の審級はもっと透明であり、物語言説の中でそうした審級が喚起される時にしても、もっとひっそりと喚起されるのであって、現実のそれぞれの読み手をこの潜在的審級に同一視することは――あるいは、現実の読

み手を潜在的審級に置き換えることは――おらく一段と容易であろうし、より的確な言い方をするなら、一段とその必然性を増すことになるのである」（以上、三〇五―三〇七頁）。

「物語世界外の聴き手は、物語世界内の聴き手と違って、語り手と潜在的読み手との『中継』ではない……。物語世界外の聴き手はこの潜在的読み手と絶対的に合致するのであり、潜在的読み手が現実の読み手への中継なのであって、現実の読み手は、この潜在的読み手と『同一視』されることもあるし、されないこともある。つまり、現実の読み手は、語り手がその物語世界外の聴き手に語ることがらを自分自身に向けられたものとして引き受けたり引き受けなかったりするのであり、（この意味では）いかなる場合にも物語世界内の聴き手と同一視されえないのである――事実、物語世界内の聴き手は結局のところ、他の作中人物と変るところのない一人の作中人物であるのだから」。「……もちろん物語世界外の語り手は、完全に作者と合致する――私としては、きわめて多くの場合そう呼ばれているものの、『暗示的』な作者、などと言うつもりはない。それは、どこからみても充分に明示的かつ公然たる作者なのである。私はまた、『現実』の作者、とも言わない。そうではなく、時には（稀ではあるけれども）現実の作者であることもある、と言うべきなのだ」（『物語の詩学』一三九―一四一頁）。「語りの審級の図式」は「現実の作者（ＡＩ）→語り手→物語言説→聴き手→（ＬＶ）現実の読み手」となる。ＡＩは帰納された作者（Auteur Induit）、ＬＶは潜在的読み手（Lecteur Virtuel）（『物語の詩学』一五八頁）。「物語言説の真の作者は、単に物語言説を語る者だけに限られるわけではないのであり、それと同様か、時にはそれ以上に、物語言説を聴く者でもあるということだ。そして、物語言説を聴く者が必ずしも、語りかけられている者というわけでもない――いつだって隣には誰かがいるものだ」（三〇八頁）。

(viii) 物語状況　物語状況とは、叙法と態が交差する場面であり、両者に関する考察をどのように結びつけるかという、これまで棚上げにされて来た問題である。ジュネットはフランツ・シュタンツェル、ドリット・コーン、ロンバーグ、ヤープ・リントフェルトを参照して、次の一覧表を作った

この表の「ゼロ」は焦点化ゼロの意味であり、作者が支配する。「内的」は内的焦点化の意味で、行為者が支配する。「外的」は外的焦点化の意味で、中立的である。この表は「人称」（表では「関係」）と「パースペクティヴ」（表では「焦点化」）と語りの水準しか含んでいないが、距離や時間の範疇（順序・速度・頻度）なども考慮するとすれば、「その一覧表はもはや作品の全体には当て嵌まらなくなり（もっともどんな一覧表でもそんなことは不可能であるが）、単にしかじかの切片、それも時にはきわめて短い切片にしか当て嵌まらぬことになるであろう。なぜなら、ある物語言説の全体をほぼ恒常的に規制しているのは、関係（「人称」）だけであるからだ」。この表が表す関係は、決定のそれでも、相互依存のそれでもなく、「それは単に、どのパラメーターどうしもアプリオリに戯れあうことができるような、言わば星座の［それのごとき相互無依存の］関係にすぎないのである」（『物語の詩学』一二一－一三七頁）。

水準 / 焦点化 / 関係	物語世界外			物語世界内		
	ゼロ	内的	外的	ゼロ	内的	外的
異質物語世界的	『トム・ジョーンズ』	『若い芸術家の肖像』	『殺し屋ども』	『無分別な物好き』	『恋の野心家』	
等質物語世界的	『ジル・ブラース』	『飢え』	『異邦人』?		『マノン・レスコー』	

(19) A・J・グレマス（田島／鳥居訳）『構造意味論』、一九八八年。Algirdas Julien Greimas (translated by Paul J. Perron and Frank H. Collins),Narrative Semiotics and Cognitive Discourses, 1990. ポール・リクール『時間と物語』Ⅱ七五－九八・一〇四－一〇九頁。ジェイムソン『言葉の牢獄』一二八－一三四・一七〇－一七五頁。なお、グレマスの記号論については、グレマス『意味について』四〇五－四二七頁の訳者・赤羽研三「グレマスの記号論について」参照。

(20) スーリオ（石沢秀二訳）『二十万の演劇状況』、一九六九年。参照、Georges Polti (translated by LucilleRay), The Thirty-Six Dramatic Situations, 1977.

(21) リクール『時間と物語』Ⅱ一〇四頁注31はグレマス『意味について』所収の「記号論的拘束の働き」と「語り文法要理」を原文で引用するが、本文では前者しか挙げない。しかし、本稿に見られるように、むしろ、後者の方が重要なのである。本稿の本文中の文献名のない頁数は後者論文の頁数。

(22) ＜記号論的四角＞の図はジェイムソン『言葉の牢獄』一七〇－一七三頁を参考に作成した。グレマスの図（「語り文法要理」一八五頁）を修正した。ジェイムソンは言う。「しかしながら実際には、われわれがある任意の概念を分節化できるのは、可能な四つの位置のうち三つだけであることがしばしばで、最後の一つ、－$\overline{S}$は依然として精神にとっての暗号あるいは謎である」と（『言葉の牢獄』一七二頁）。

(23) グレマスは第三段階の「表出」段階についてはほとんど具体的に分析していない（参照、「語り文法要理」二一二－二一三頁）。この点については、第三章でポール・リクールを論ずる際に触れることになろう。

(24) A. J. Greimas, Maupassant: la sémiotique du texte, exercices pratique, 1976 は参照できなかったので、取り上げない。これについては、リクール『時間と物語』Ⅱ八六－九一頁を参照されたい。

(25) 山路龍天／松島征／原田邦夫『物語の迷宮：ミステリーの詩学』、一九九六年。なお、同様に構成が単純とされる昔話については、以下を参照。マックス・リューティ（野村　玄訳）『昔話の本質』、一九九四年。河合隼雄『昔話の深層』、一九九七年。森省二／橋本和明／森恭子『童話と心の深層』、一九九六年。樋口圭子『イソップのレトリック：メタファーからメトニミーへ』、一九九五年。

(26) 小野坂「物語論としての裁判論」法政理論二七巻三・四号、同「日々の生活世界における経験の構造（一）（二）」法政理論二八巻四号・二九巻二号、同「物語の意義と構造（一）」法政理論二九巻四号において縷々述べてきたように、われわれと物語性は切っても切れない関係にある。このことは本文で引用するリクールの悲鳴にも似た文章からも分かる。

(27) ジェラール・ジュネット（花輪光／和泉涼一訳）『物語のディスクール：方法論の試み』、一九八五年（文献名を挙げない頁数は本書の頁数）。ジュネット（和泉涼一／神郡悦子訳）『物語の詩学：続・物語のディスクール』、一九八五年。リクール（久米博訳）『時間と物語』Ⅱ一三二―一六六、一七四―一七八、一八三―一八四頁。

(28) ジュネットは言う。「（書かれた）物語言説の時間が『擬似時間』であるのは、それが読み手にとっては経験的にテクストという空間から成っている、という意味においてであって、これを［時間的な］持続に（再）転換するには、もっぱら読みの行為に頼らざるをえないからだ」と（『物語の詩学』二二六頁）。これに対してリクールは言う。「……私はその時間を、擬似時間とは呼ばず、まさに、虚構の時間と呼ぼう。それだけ、その時間は、物語的理解にとって、フィクションの時間的統合形象化に結びついている。物語論の認識論的レベルを特質づける合理化するシュミレーションを、物語的理解のかわりにすることによって、虚構を擬似におきかえてしまうのだ、と私は言おう。そのシュミレーションとは、われわれがたえずそれの正当性とともにその派生的性格をも強調してやまない操作のことである」と（『時間と物語』Ⅱ一七六頁注44）。

(29) リクールは言う。「〈時間〉との戯れ」を読みかえす度に私は割り切れない思いをする。「語り手＝主人公が味わう時間

についての虚構の体験は、物語の内的な意味と結びつけることができないために、作品にとって外在的な理由づけに関連づけられる」。物語論は無意志的記憶と物語の技法との関係を逆転して、要するに視像（ヴィジョン）を様式に還元してしまう。だから、プルーストの『失われた時を求めて』は倒錯した〈時間〉の小説になってしまう。しかし、この逆転をまた逆転させて、物語技法についての研究は、失われ、再び見い出される時間経験についてもっと鋭敏な理解を回復するための長いまわり道と解すべきではないか。この時間についての虚構の経験こそ、物語技法に意味と意図とを与えてくれるものだからである。もしそうでなければ、もし賭けられているものがないならば、どうして戯れが「恐るべき」もの（一八四頁）となるのかと（『時間と物語』Ⅱ一四七―一四九頁）。

(30) ジュネットは言う。「……私は、物語言説には模倣は存在しないと考えている。なぜなら、文学においてはすべてが、もしくはほとんどすべてがそうであるように、物語言説もまた言語的行為であり、したがって、言語一般に認められる以上の模倣が、特別に物語言説にだけ認められることはありえないと思われるからだ。あらゆる言語行為と同様、物語言説は情報を伝えること、すなわち、さまざまな意味作用を伝達することしかできない。物語言説は（現実ないし虚構の）物語内容を『再現する』のではなく、それを物語る、つまり言語という手段を通じてそれを表意するのである」と（『物語の詩学』四五頁）。

(31) ジュネットは言う。メタ物語世界という術語の場合、「メタ méta――という接頭辞が論理＝言語学における用法とは逆の方向に機能しているということだ。論理＝言語学においては、メタ言語というのはその内部で（別の）言語について語るための言語であるのだが、私の用法では、メタ物語言説というのは、ある物語言説の内部で語られるものなのである」。しかし、ジュネットは下位物語言説という提案された用語を、従属関係をあまりに強調しすぎるとして退ける（『物語の詩学』九五頁）。

(32) ジュネットは「思想的機能」の代わりに「解釈的機能 fonction interprétative」というもっと中立的な術語を、というスレイマンの提案に賛成する（『物語の詩学』一八七頁注2）。